「ダーチャ」と身土不二

(2013年11月30日)

2009年3月に『食べもの文化』という雑誌に小文「日本の農業への心配と期待」を寄稿し、そこに「身土不二」とロシアの自給畑「ダーチャ」について次のように書きました。

「身土不二」という真理のことばがあります。体（人々の健康と暮らし）と土（地域の自然と文化）は一体であって、二つに分けることはできないという教えです。能率が良くて安いという理由だけで、食卓の6割が外国産となってしまっている日本人のいまの生活は身土不二とはかけ離れています。このことを、破綻の時代だからこそ、しっかりと見つめ直したいと思います。

1980年代の終わりから1990年代のはじめの頃、旧ソ連が崩壊し新しいロシアが作られました。彼の地では経済も、社会も大破綻で、人々はたいへんな苦労をしましたが、大量の難民が発生するという事態にはなりません。ロシア社会は危機の中で命拾いできたのですが、その背景には、旧ソ連の庶民は「ダーチャ」という名の自給畑をもっていて、社会の破綻の中で、人々はそこにしがみつき、そこを耕し、食べものを自分たちで賄っていたという事情があったといえます。

日本でも、自ら耕し、自ら種を播き、作物を育て、その恵みを大切にして食べていくことにみんなで取り組むことを考えるべき時にきています。もちろん、それぞれの生活条件があり、得意不得意もあるでしょう。いろいろな事情で、自分で耕すことができない方も少なくないでしょう。しかし、そういう方々も食べることをやめるわけにはいきません。だとすれば、そんな場合には、土とともに生きている農家と親密なおつきあいを作ることを考えるべきではないでしょうか。

この文章を石巻魚市場にお勤めの須能邦雄さんという私と同年の方がお読みになり、次のようなお手紙をいただきました（2009年2月16日付け）。須能さんはロシア新生の混乱期に彼の地で生活されており、ご自身もダーチャを耕し、暮らしを支えたとのことでした。私は雑事に追われていた頃で、せっかくのお手紙にご返事も差し上げず、たいへん失礼をしてしまいました。でも、須能さんのお手紙は、私にとって嬉しく懐かしい思い出です。震災津波のなかで須能さんはどうされたのでしょうか。ご無事をお祈りするばかりです。

私は平成2年から3年間サハリンの日ソ合弁会社「ディアナ社」の副社長として大洋漁業から出向しており、我々日本人もダーチャを購入しロシア人に近い生活を体験しました。

私も先生の述べられている様に身土不二、地産地消（私は知産地賞と当地で呼んでます）が重要であり、日米の市場原理主義を反省し、人間を大切にする調和のとれた国づくりに方針転換すべきと思います。

ゴルバチョフ、エリツィン時代で政治、経済の両面で混乱しておりましたが、ダーチャを中心に市民は融通し合い、週末の仲間との夕食などなごやかな雰囲気は私の子供時代を思い出させるもので心暖まるものでした。